

カミカゼと救い

NZZ am Sonntag

<https://nzzas.nzz.ch/kultur/kamikaze-und-rettung-leiko-ikemura-kunstmuseum-basel-ld.1482313?reduced=true>

日本・スイス人芸術家イケムレイコは絵画と彫刻のなかで人間と自然の調和を追求している。バーゼル美術館での大規模な展覧会は彼女にとっても喜ばしいものとなった。

ゲルハルト・マック／2019年5月17日

図像

戦争の悪夢を描く：イケムレイコの絵画「カミカゼ」、1980年  
(写真：クリストフ・シェンカー／プロリテリス)

始まりは海だった。そこからすべてが起こったかのようだ。まるで創世記を見るように、魂が水面の上空に浮かんでいる。イケムレイコの作品にはそこに船へと突撃していく飛行機が描かれている。水平線は左へと傾いて描かれており、攻撃のダイナミックさを強めている。

カミカゼと呼ばれた第二次世界大戦で日本軍が行った自決作戦は、日本と結びついたステレオタイプである。同名のタイトルを持つこの絵はバーゼル美術館で開催中の展覧会入り口に掛けられている。本展は作品約120点を擁し、日本・スイス人画家イケムレイコの芸術が展望できるものとなっている。

海はイケムレイコの人生において初期から重要な役割を担っている。彼女は1951年に海沿いの街・津に生まれた。そこでは戦争の恐怖が戦後も長引いて残っており、後に画家となる彼女もそれを身をもって感じていた。もうひとつ経験をもって知ることになるのが海の様相だった。どこまでも続く霞、夜が来ると闇に沈む水平線、風と波に反射してきらきらとする光。

(動画)

海は意味なく死にゆくためだけの場所ではなく、憧れの場所であり、何かが始まること・境界を超えていくことを約束してくれる場所でもあった。空と地が霧に包まれたとき、すべてが結びつく場が生まれる。そこではすべての総体、対立するものどうしが結びつき、目に見える世界は何かへと開いてゆく。日常の実体的なものへと作用し、非実体的なままにいる何か…そう表現したのがフリードリヒ・ニーチェの詩「Nach neuen Meeren (新しい海へ)」であり、イケムラの展覧会のタイトルにもなっている。

イケムレイコのドローイング、絵画、粘土やブロンズによる彫刻が目指すものは二つある。われわれ人間が害してきた人間自身と自然にかたちをあたえ表現すること。そしてそれらが和解を得ることへの希望と地上の樂園への祈念を抱き続けること。

この振り幅のなかを彼女の作品は動き続けている。攻撃的な蜘蛛と超然としたアマゾンの女、人間・動物・植物からなる混成生物。予感に満ちた汚れなき少女が宙にたゆたい、宇宙的な情景は一種の自然崇拜のように禅の精神を賛美する。見当違いであったとしても、この画家は現代が持つ傷から手を引っこめることはない。静かに、冷酷に、魅惑的に美しく。

イケムラレイコ「Nach neuen Meeren（新しい海へ）」、バーゼル美術館にて9月1日まで。カタログはプレステル社刊。